

越前市武生の芦山公園の成立に関する基礎的考察：  
造園家・本多静六の設計説明書(1925)について

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2020-05-01<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 市川, 秀和, 平野, 忍<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10098/10888">http://hdl.handle.net/10098/10888</a>                         |

# 越前市武生の芦山公園の成立に関する基礎的考察

－造園家・本多静六の設計説明書(1925)について－

A Fundamental Study on historical Foundation of “Rozan-Park” in Takefu – Echizen City  
－ Drawing and Specifications of Professor Landscape Architect Dr. S. Honda –

市川 秀和\*  
(福井工業大学建築土木工学科)  
平野 忍\*\*  
(京福コンサルタント(株) 建築設計室)

## 1. はじめに－福井県の近代公園史をめぐって－

日本近代の都市形成史における「公園」のもつ歴史的意義は、日本初の洋風公園と称讃される東京の「日比谷公園」(開園：1903、設計：本多静六/図1)の場合のように、大都市を中心に既に多くの研究成果が積み重ねられてきているものの<sup>1)</sup>、地方都市の事例については未だ少ないのが実情である。かかる現状課題を踏まえて、およそ20年前から北陸地域の近代公園の成立に関する調査研究に着手しており、福井県内では足羽山公園(福井市、設計：長岡安平/図2)と西山公園(鯖江市)について既に報告した<sup>2)</sup>。なお東京都公園協会・所蔵の「長岡安平史料群」<sup>3)</sup>の整理作業が近年進められた結果、福井県内の長岡による設計が従来から周知されてきた足羽山公園だけでなく、さらに三秀園(福井市)や西山公園(鯖江市)、敦賀公園(松原公園、敦賀市)も含まれることが、新たに判明した。その上、こうした近代公園設計のパイオニアとして長岡安平に続く本多静六が、大正14年(1925)に越前市武生の芦山公園の設計書を纏めていたことも考え合せると、この著名な長岡と本多が中心となって福井県の明治・大正期の近代公園史は創り出されてきたと言えるであろう。

そこで本稿は、本多静六の設計した芦山公園の成立した時代状況、そしてこの設計説明書を具体的に読み解くことが主な目的であって、当公園の歴史の変遷や現状との比較等については次稿に譲るとともに、福井県近代公園史の体系的究明を目指す一つの基礎的考察と位置づける<sup>4)</sup>。



図1 本多 静六 (1866～1952)

本多静六の作品/福井県  
芦山公園(越前市武生 1925)

長岡安平の作品/福井県  
足羽山公園(福井市 1908)  
三秀園(福井市 1909)  
西山公園(鯖江市 1909)  
敦賀公園(敦賀市 1919)



図2 長岡 安平 (1842～1925)

(キーワード：芦山公園、村国山、越前武生、本多静六、近代公園史)

\* 福井大学地域環境研究教育センター・学外協力メンバー  
Fukui University of Technology (910-8505 Gakuen3-6-1, Fukui)

\*\* 福井工業大学大学院・科目等履修生  
Keifuku Consultant for Construction (917-0026 Tada11-2-1, Obama)

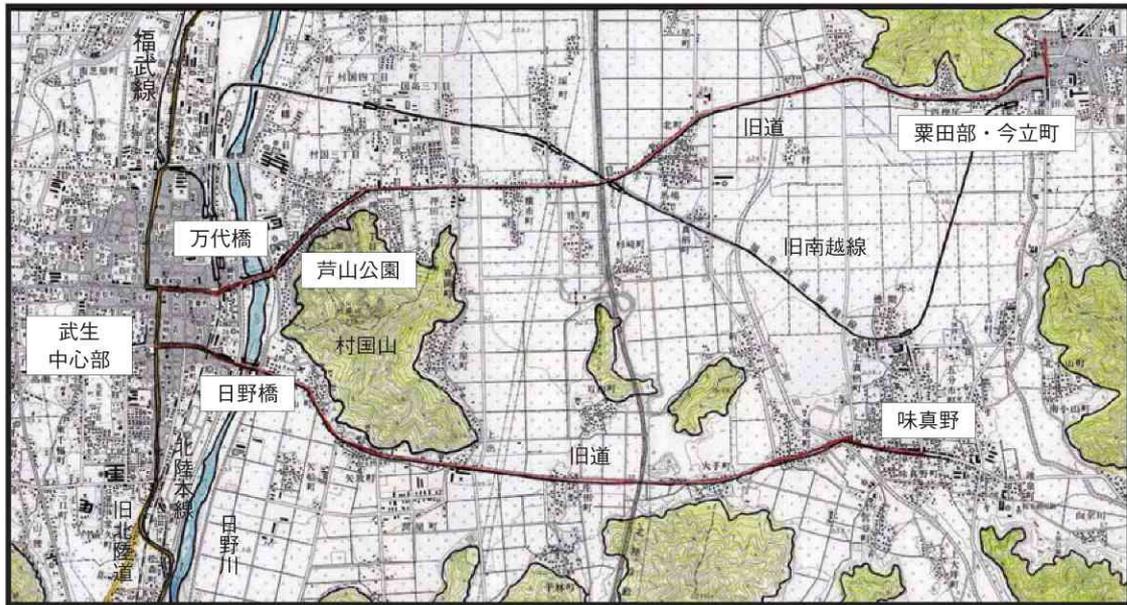


図3 芦山公園の周辺（武生市街地から今立、味真野へ）

国土地理院「1：25000 武生」（1978年修正測量、部分図）に加筆作成したもの

方位 北：上

## 2. 村国山のトポグラフィと近代都市施設の「芦山公園」

現在の芦山公園を含む「村国山」（238.9 m）は、武生中心部より見て、「日野川」を挟んだちょうど東側に位置しており（図3）、その特徴的な山容は市街の中からも良く眺めることができる（図4）。そして日野川に架かる北の「万代橋」と南の「日野橋」を往来する「旧道」は市街地に入ると、南北に貫通した「旧北国街道」と繋がり、「武生」と「今立」、「味真野」を結ぶ歴史的に重要な交通路となっている（図3）。こうした武生のまちと村国山の位置関係をトポグラフィの視点から考えると興味深い上に、福井のまちと足羽山（116.5 m）の比較も有効であるが、ここでは敢えて触れず別稿に譲る。

さて次に、芦山公園の成立した当時の時代状況について、簡潔に触れておきたい<sup>5)</sup>。

明治22年（1889）の市制・町村制公布により「武生町」（人口：12,937人）が誕生し、続く明治29年に北陸本線の鉄道が開通して現在地に「武生駅」が新設されるなど、江戸の城下町の風情溢れる中心部が徐々に近代化へ向けて進み始めた。さらに大正3年に「武岡鉄道」（のちの南越線）、そして大正13年に「福武鉄道」（のちの福武線）が開通するにともない、武生の近代化による新しい公共的な都市施設（図書館、公園、公会堂など）が続々と着工し、さらに「市制」への要望が高まった。

こうした大正末期から昭和初期にかけて武生町の近代化に最も貢献した人物の一人が、蚊帳製造を営む「山本甚右衛門」（1868～1951：6代目・山本甚三郎、山甚産業）であり、大正11年（1922）に「町立図書館」の建設費を寄付（翌年開館）した。またその直後の大正12年9月の関東大震災を機に、村国山の興禅寺（曹洞宗）から北東部一帯の土地を大正13年2月に買い受けて武生町へ寄付し「公園」新設へ向けて活動し、まず国家泰平と衆民幸福を願って「白衣観音像（芦山観音）」を公園計画地内にて大正14年10月に設置するとともに「芦山公園」開設へ辿り着いた。ただこの時点では公園整備は不十分であり、公園設計を依頼した本多静六による設計図も未だ作成中であったものの、この直後の大正14年12月には本多の設計図が完成し、公園整備は徐々に着手された。

この後、大正から昭和へ時代は移り、山本甚右衛門は新たに「公会堂」建設へ乗り出し、昭和3年に竣工するとともに、芦山公園の整備も進められた。こうして大正14年開設の芦山公園は、本多の設計図を基に徐々に整備され、昭和3年に漸く完成を見たと考えられる。また公園整備により開発された村国山麓の日野川沿いには「村国別荘群」<sup>6)</sup>と呼ばれる秀逸な近代和風住宅地が誕生した。



上図：武生町鳥瞰図（部分、加筆）  
昭和8年（1933）

右図：武生市街図（加筆）  
越前地誌略・挿図  
明治11年（1878）

図4 描かれた武生と村国山（芦山公園）周辺

### 3. 造園家としての本多静六について<sup>7)</sup>

本多静六（旧姓・折原）は、慶応2年（1866）に現在の埼玉県久喜市菖蒲町にて、豪農・折原家の第六子として生まれたが、明治9年に父・禄三郎が急逝したことにより家計は苦しくなったために、農作業を手伝いながら勉学に励んだ。明治13年に14歳となった折原静六は、東京で書生を始めつつ将来へ向けて歩み出した。明治17年に東京山林学校へ入学して優等生となって注目されると、教員の知人の本多家から強い婿養子の申し入れがあり、「本多静六」となったのである。

その後、学校は東京農林学校と改称し、明治23年に卒業するとドイツ留学に旅立ち、当時有名なターラント高等山林学校を経て、ミュンヘン大学よりドクトル（博士）を得るまでになった。そして帰国した明治25年には東京帝国大学農科大学助教授に就き、まず「造林学者」として出発したが、その注目すべき仕事として留学経験を活かした「大学演習林」の創設が知られる。さらに明治31年には大著「森林植物帯論」により、我が国初の「林学博士」となった。このような本多の造林観とは、生産性を重視した一斉造林では無く、「天然更新・混交林」と「美的配慮（森林美学）」による森林施業を基礎としたものであり、かかる本多の独自の思想が、その後の造林・造園・都市計画など広範な活動を有効に可能とした所以であろうと考えられる。

さらに造園家として知られるようになったのは、冒頭で触れた明治36年に開園した日本初の洋風公園「日比谷公園」を設計したことによる。これもドイツ留学の成果の一つと考えてよい。これ以降、本多は北海道から九州までの全国各地の公園設計に携わることになった。そこで本多の公園観には、ドイツ留学でみた都市の近代化と生活環境の悪化による社会問題が根底にあり、労働者を含む全ての市民が快適な生活を楽しむ機会と場所が必要であり、自然への回帰（ルソー）を実現する考え方があり、公園計画には自然環境に調和した「休養」のほか、健康増進の「運動」も含まれていた。

そのほか本多は、「明治神宮の森づくり」「国立公園の設置」に果たした貢献は絶大であり、さらに「近代造園学」を確立させ、後進の本郷高德・上原敬二・田村剛など多くの造園学者を育成した。

4. 本多静六・池邊武人『福井縣武生廬山公園 設計図及説明書』（1925）について

この説明書の本文は「緒言、前論、本論、結び」の四部構成から論述されているため、これを二つに大別（「緒言・前論」「本論・結び」）し、以下に解説する。なお本多とその助手・池邊武人の連名が冒頭に明記されているが、本多による論述と考えてよいであろう。

4-1) 緒言・前論

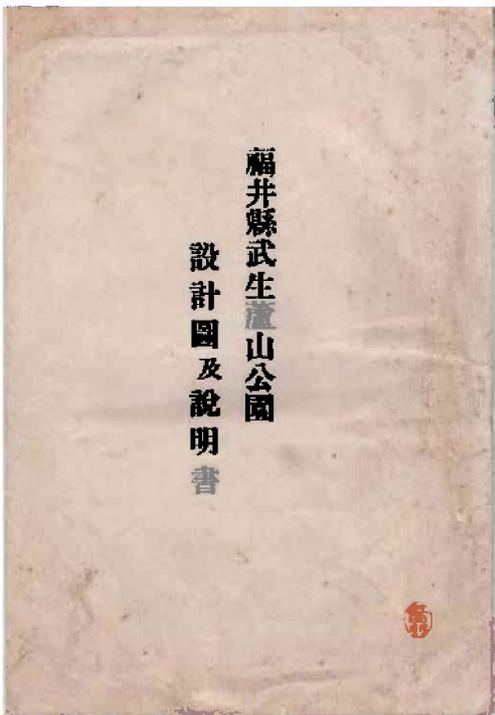
まず緒言では、依頼者である武生町長と助役、そして山本甚三郎らの案内から現地視察した経緯が記されるとともに、その現地調査が十分でないため、大よその方針を示すに過ぎないと断っている。

続く前論の主旨は、本多の公園論である。近代機械産業の発達が人間の健康と自然環境に危機を及ぼし、文化的生活と健康のためには野外生活・運動などが不可欠であり、従って市街地周辺の森林を公園的に利用することが重要なのであり、「森林公園」が必要となる所以を説いている。

では具体的に「森林公園の森林は如何に取り扱われるべきか」の問題に当たり、森林風致・風景美を助長する樹種（サクラ、カエデなど）をスギ林等に混植し、森林風景が単調に陥らないように施業するのが原則であるという。ただ森林公園内に存する道路と建物の外は、一切人為を加えたように感じさせてはいけなく、つまり自然の様相を出来る限り発揮させることを尊重している。

また森林公園内の「道路」については、散歩道や人力車道、馬車・自動車道、橋などあるが、従来の公園設計では道路を強いて直線となすことがあり、これは禁物であると指摘する。むしろ公園地にあつては道路を自然の地勢に応じて曲線に造る方が良いとする。さらに道路の両側では、樹木を伐採して赤土が露出するまで掘り起こす悪い例があり、「美しき下木と下草のみ残す」ことが公園林らしく好ましいと述べる。そして森林風景の様な見え方は面白くなく、天然の地勢や方向等を考慮して適切な樹種林相を形成し、自然の要素に適応した森林美へ変容させる施業の必要を強調している。

そのほか眺望場所の「腰掛（ベンチ）」は、倒木や古木を運んで自然らしく置き、ペンキ使用は禁物として、その根拠にフランスの哲学者ルソーの「自然の成せるものは總て美となり、人間の手に依りて汚損す」という言説を引用し、さらに「案内図」「茶屋」等の設置についても同様に説いている。



本文の内容構成

|    |              |
|----|--------------|
| 緒言 |              |
| 前論 | 森林公園の必要と其の設備 |
| 本論 | 廬山公園設計案      |
|    | 甲、第一期の計画     |
|    | 其一 公園道路      |
|    | 其二 各局部の設備    |
|    | 其三 樹林の改良手入   |
|    | 其四 大運動場      |
|    | 乙、第二期の計画     |
| 結び |              |



上図：巻頭写真「武生萬代橋より廬山公園を望む」

図5 『福井縣武生廬山公園 設計図及説明書』

#### 4-2) 本論・結び

本論の冒頭では、芦山公園の立地条件として、武生町の東方日野川を隔てた村国山の北半部に位置すると説明し、別称「村国山公園」も紹介している。さらに村国山の山中には長廬山・興禅寺などの社寺が林内に点在し、山岳地の地勢や眺望等が本公園の特徴となることが述べられている。

#### 甲、第一期の計画（図6参照）

##### ①公園道路

本公園内の道路を「自動車大回遊線」と「散歩道」に大別し、相互に交差連絡して全体の廻遊性を造り出す計画が意図されている。

具体的に幾つか事例を挙げると、まず神明神社側の「公園入口」から興禅寺前に至る「本道」を改築して「自動車道」とする。さらに計画中の神社裏の「見晴台」から「忠魂碑」を経て「観音像」に至り、「興禅寺」へと繋がる「山道」を緩やかな勾配に改築し、その道の両側には多数のヤマザクラを植えて並木道を形成する。

また公園入口より岐れて「弁慶岩」を過ぎ、峯に沿って登り「三角点」「城址」「観音像」へと至る道を改築して「芦山大廻遊道路」と称する。

そのほか、万代橋より近い公園の西側に「新公園入口」を設け、そこから「蛇谷」を越えて「城址」へ至る「歩道」を造成する。

##### ②各局部の設備

この「設備」の内容は多様であり、見晴台広場、腰掛（ベンチ）、養魚池、釣堀、天然植物園、果樹園、鹿園、夏期林間学校、パノラマ台、休憩所、飲食店、案内板などについて具体的に計画されている。この中から図面上で判明した事例の幾つかを取り上げて紹介する。

神明神社の社叢（モミ、カシ等）や保安林（クヌギ、アベマキ等）を「天然植物園」とする。

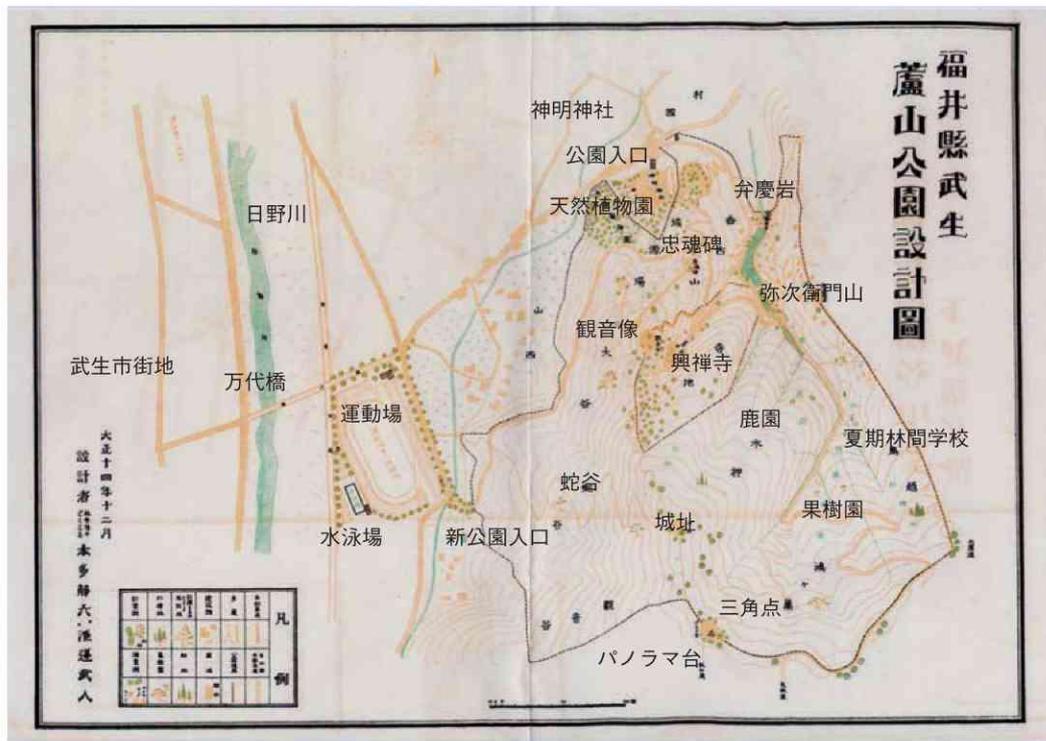


図6 「福井縣武生蘆山公園設計図」(説明内容により加筆)

「鹿園」は、その周囲に高さ7尺の木柵を造り、その下半部は密にして犬の侵入を防ぐことが重要である。ここに牝鹿2、3頭、牡鹿1頭を放てば、牝鹿は年々1頭づつ仔鹿を産むであろう。冬期間は、小屋を造って避寒するようにする。

鹿園より谷沿いに現在スギ林のある一帯は、地形緩斜にして夏季は涼しい場所であるから、ここを「夏期林間学校」講義場となして使用すると良い。

また夏季林間学校敷地の上方は、現在クリ林の一帯であることから「果樹園」とする。そのほか、カキ、モモ、ナシ、ウメ等を植栽し、監督人を置いて訪問客に広く販売すると良い。

芦山公園内で最も高い「三角点」の場所に、強風に耐える四阿を設置して「パノラマ台」とする。その天井には「パノラマ図」を描き、主要な地勢を図示し、自然地形の学習場とする。

公園内の適当な場所に無料の「休憩所」を設置し、さらに数カ所の「飲食店」を設ける。

北入口（神明神社側）と西入口（新公園入口）には「鳥瞰図式」の公園全体の「案内板」を掲げ、また公園内の適切な場所にも「案内板」を設置する。

### ③樹林の改良手入

現存するスギ、マツ、ヒノキ林は、経済林の育成を目的とした林業的取扱いでは無く、完全な人工林の森林美を発揮するように努めるとともに、また雑木林については、ヤマザクラやモミジ等を補植して不良雑木を除去して、一大風致林の形成に向けて取り組むことが述べられている。

「天然植物園」の上方から「観音像」に向けてサクラを補植し、「サクラ山」となす。

最高地点の「三角点」を中心とした山脈通り一帯には、マツを補植して「マツ林」となす。

「弥次衛門山」を中心に「ツツジ岡」となし、さらにその南方を「ハギの名所」とする。

「観音像」付近には、ヤブツバキの原生が多く、これを利用して「ヤブツバキの名所」とする。

「果樹園」の下方部一帯に「梅林」を仕立てて、梅花鑑賞の地となす。

### ④大運動場

現在の武生町には、市民が利用できる「運動場」がないことを指摘し、その必要性を説いている。ただ村国山自体には適した地点がないことから、万代橋付近の日野川沿いを整備して「大運動場」と「水泳場」の設置を強く提案している。

## 乙、第二期の計画

第一期で計画した「歩道」を「自動車道」に改造し、興禅寺の下方で連結して「廻遊自動車道」とするなど、散策する歩道以上に自動車による園内の廻遊性を強調している。

## 結び

本設計説明書の内容は、大方針を提示したに過ぎず、今後の現地施工に当たっては、いっそうの精緻な実施計画が必要であって、かかる創意を以て「自然美（森林美）」と「山岳・眺望・樹林」を特徴とした町唯一の公園で、広く町民に遊覧地として開かれた「芦山公園／森林公園」が完成すると明確に論究した。

## 5. おわりに —総括と展望—

足羽山公園（福井市）と西山公園（鯖江市）の成立史に関する研究報告に続き、本稿では、越前市武生の芦山公園を取り上げ、その本多静六による設計説明書（1925）を具体的に読み解くとともに、当公園の成立した時代状況についても考察した。この成果を踏まえて、今後続く研究課題を以下に提示することで本稿を終えたいと思う。

①芦山公園は、本多静六が設計した森林公園として当初誕生したものの、終戦後の昭和33年には都市公園として新たに位置づけられた。芦山公園の誕生から現在までの歴史的変遷を明らかにすると

ともに、本多の設計案がどこまで実現し、如何なる歴史的意味があるのか、本多の別の公園設計とも比較しなければならない。

②福井県近代公園史上における芦山公園の位置づけを考察するとともに、明治後期の長岡安平から大正・昭和初期の本多静六へと至る公園設計の転換についても注目する必要がある。

③長岡安平の設計として新たに判明した「西山公園」「三秀園」「敦賀公園」も今後取り上げる。

## 註

1) 日本近代都市公園史に関する主な先行研究は、以下の通りである。

田中正大（1974）『日本の公園』（SD 選書）鹿島出版会

丸山 宏（1994）『近代日本公園史の研究』思文閣出版

白幡洋三郎（1995）『近代都市公園史の研究』思文閣出版

2) 福井県内の近代公園史に関する拙稿は、以下の通りであって本誌にて報告した。

市川秀和（1999）「足羽山公園の成立と場所の政治学－福井市における近代公共空間の形成に関する一考察」福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第6号

市川秀和（2000）「軍都の解体から公園の再生へ－鯖江市における近代公共空間の形成に関する一考察」福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第7号

なお以上の拙稿2編はまとめ直して、以下のように日本建築学会北陸支部の報告書に提出した。

市川秀和（2014）「福井県の近代公園の成立について－足羽山公園と西山公園－」『北陸信越地方の歴史的建造物－地域文化財の調査研究と保存活用』日本建築学会北陸支部歴史意匠部会

そのほか石川県の近代公園に関して調査報告したことがある。

市川秀和（2008）「近代公園（兼六園、卯辰山公園、一本松公園）」

『石川県の近代化遺産－石川県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書－』石川県教育委員会

3) 東京都公園協会の所蔵する「長岡安平史料群」の目録と図面集が、以下の通り刊行されている。

『長岡安平の残した設計図－わが国ランドスケープの嚆矢』（2015）東京都公園協会

4) 本多静六の設計解説書では「廬山公園」と表記されているが、当時から「芦山公園」が使用されて現在まで親しまれていることから、本稿の表題・本文中は「芦山公園」の表記で統一する。

5) 武生の近代史に関しては、以下の文献を主に参照した。

齋藤嘉造（1963）『たけふ－歴史と伝説を尋ねて－』武生高校社会科研究会

『武生市史 概説篇』（1976）武生市役所

6) 「村国別荘群」に関しては、『福井県の近代和風建築』（2012）福井県教育委員会を参照されたい。

そのほか武生の中心部南端で日野川沿いに有名な「逍遥園」が建設されたことも見落せないであろう。『逍遥園 襖の下張り展 資料集』（2005）越前市武生公会堂記念館を参照されたい。

7) 遠山 益（2018）『本多静六－緑豊かな社会づくりのパイオニア』さきたま出版会などを参照。

## 図版出典

図1 遠山 益（2018）『本多静六－緑豊かな社会づくりのパイオニア』さきたま出版会

図2 浦崎 真一（2017）『長崎偉人伝 長岡安平』長崎文献社

図3 国土地理院「1：25000 武生」（1978年修正測量、部分図）に加筆作成したもの

図4 特別展『絵図をよむ 描かれた越前市』（2011）越前市武生公会堂記念館

図5、6 『福井県武生廬山公園 設計図及説明書』（1925）福井工業大学市川研究室 所蔵